

『水猿曲』 (白拍子)

『水軍女王』 (創作能舞台)

於：上賀茂神社・庁ノ屋 奉納上演

8月7日

開場：18:30

開演：19:00

入場無料 (定員 130 名、先着順)

*当日 16:00 より庁ノ屋前にて整理券を配布します。

原作・脚本：桜井真樹子

映像：相内啓司

シテ：桜井真樹、井川仁水

能管：滝沢成美、

鼓：今井尋也

協力：平野砂峰、海上梓、中尾 美愉、福永 菜都美、
山中 美奈代、谷澤昇希、古都企画

主催：上賀茂神社、上賀茂自治連合会、京都精華大

ART
x
KAMIGAMO

上賀茂神社アートプロジェクト 2010

第1部『水猿曲』

白拍子：桜井真樹子、映像：林ケイタ、谷口正博、兵鴻、相内啓司

第2部『水軍女王』

原作・脚本・演出：桜井真樹子、映像：相内啓司、舞台監督：今井尋也

シテ：桜井真樹子、井川仁水、能管：滝沢成美、小鼓：今井尋也

水猿曲（みずのえんきよく） 或号水白拍子（あるいはみずのしらびょうしとごうす）

白拍子は、平安末期に登場する歌いながら舞う女性のこと、または、「白拍子」という節、拍子の特徴を持ってその曲の形態をさす。舞臺の手を舞ったとも言われているが、舞いも歌も途絶えて今はない。

その中で、奇跡的に残された譜がある。それが、「今様五首」と「水猿曲」である。

「水猿曲」の譜が残されていたのは、上賀茂神社三手文庫蔵のもので、その譜を琵琶の龍笛の名手として知られている芝祐靖氏が現行の雅楽譜の形式に直した。それにしたがって歌い、その歌に桜井が振付けをした。

水猿曲は「あるいは水の白拍子とも名付けられている」とされている。梁塵秘抄口伝集第十四には、仁安元（1166）年、「平氏にあらざれば人にあらず」と今をときめいた平時忠の今様の会で、人もまばらになったところで、「水の水白拍子」が乱舞をする、とある。

〔歌詞〕

水のすぐれておぼゆるは 西天竺の白鷺池
尽澄許由にすみわたる
昆明池の水の色 行末久しくすむとかや
賢人の釣を垂れしは 巖瀬瀬の河のみず
月影ながらもなるは 山田の寛の水とかや
葦の下葉を綴るは みしま入江の水みず
春立つ空の若水は 汲むとも汲むとも
尽きもせじ尽きもせじ

〔意味〕

優れている水として忘れられないものを掲げていくと、まずは、西の彼方からは天竺（いんど）の白鷺池（はくろち）
これは、清らかに静かにたたずんでいる。
昆明池の水の色はいつまでも永遠に澄むという。
賢人（巖光という人）の釣りの糸を垂れているのは巖瀬瀬（げんりょうらい）で、その河の水も優れている。
月影で透れて見えているのは、山田の寛（かけい）であるとか、葦の下葉を閉ざしているのは、三島入江（摂津の國の歌枕）の氷水のせいだ。
それが、春になると、その空の下の若水は、汲んでも汲んでも、尽きることがないのだよ。

水軍女王

瀬戸内海の大三島というところに大山祇神社がある。そこには、平安時代からの武將たちが戦勝御札として奉納した、おびたしい数の鎧兜（よろいかぶと）がある。そこに、「紺絲裾素懸威刺丸（こんいとすかけおどしどうまる）鶴姫 [大祝安用女（おおほりやすもちのむすめ）] 着用 室町時代」という鎧があった。大祝（おおほり）とは、小千（おち）と呼ばれ、後には「越智」と書く氏族が大山祇神社の神官を勤めるときに名乗る姓らしい。大三島、大島、伯方島は、越智と呼ばれる地方でもある。室町時代、これら、瀬戸内海の島々は、「村上海賊衆」あるいは、「村上水軍」と呼ばれる一族が勢力をふるっていた。

この作品は、この鶴姫の鎧から発想を得た。戦場におけるジェンダーの問題は、従軍慰安婦、強姦、暴行殺人を始め、数限りなく多い。白拍子も、実は、従軍慰安婦のひとつ形態だった。彼女たちは、白の箱巻を挿していた。白拍子静は、源義経と逃亡生活を共にした。正室は、戦場にはいかない。千手前は、源頼朝と戦った平重衡の処刑の前に一夜を共に過ごし、源一族の怨霊となって祟らぬよう、精魂込めて彼の心身を癒した。

戦国時代になると、武將は、白拍子の代わりに稚児（少年）を連れてゆくようになり「男色は武士のたしなみ」と言われるようになった。「戦国時代」と呼ばれるように、当時、日本は大軍事国家で、武力闘争の絶えない日々を送っていた。

戦国武將は歴史に名を残しても、力のない非業の死を遂げた人々の命は語り継がれない。「歴史は、勝者の物語」だが、能は、「名も亡きひと」や「敗者」が再び亡霊となってこの世に現われ、物語る。寺や神社で、これらの人々の霊を慰めるために、作られた儀式が、「水軍女王」の作品として奉納できたらと願っている。

<あらすじ>

ある僧が、修行の山から下り「菩薩一行（人々とともに暮らすことを修行とする）」に勤もうと、舟に乗り、島に向かう。そのとき、突如海は荒れ、女鬼神が現れる。「おまえの前世は、この海で、敵である私を背後から斬りつけ、死体となった私の身体を犯したのだ。」女でありながら、戦い続けた女武將は、その憎しみと怒みから心が鬼神となった。僧は、女鬼神に両目を奪われた。遭難した島に暮らし、菩薩一行に助んだ僧は、やがて死を迎える。そのとき、月光菩薩が現れた。それは、女鬼神が怨念から解き放たれた姿だった。月光菩薩は、「今なお戦いに明け暮れる国がある。その国にもう一度生まれ変わって、今生のように彼らに慈悲を与えてほしい」と。そして僧は再び両目を与えられる。それは青い目。人々を助ける人、それは、ある国では、僧侶、ある国では、聖職者と呼ばれるだろう。もし、彼の心が崇高であれば、その人は、國や宗教を超えて、黄い国、嘆き悲しむ人々のものに生まれ変わるだろう。聖者は、決して見捨てることなく、彼らのもとにやってくる。